

『御所桜堀川夜討』

元文二年（一七三七）一月に大坂竹本座で初演された全五段。義経の堀川御所を、頼朝方が襲撃する堀川夜討ちに関わる人物たち、土佐坊昌俊、武蔵坊弁慶、静御前とその母磯の前司に、独自の解釈を施している。「弁慶上使の段」は三段目切。初演以来、二段目の評価が高く、文化七年（一八一〇）ごろから三段目の上演が主になってゆくようだ。四段目は明治二十年代以降の上演記録がなく、歌舞伎の方で「藤弥太物語」としてごく稀に上演され、近年では坂東三津五郎家の芸。

乳人侍従太郎の館で、懐妊中の卿の君を慰める内、腰元信夫の母おわさが「海馬（タツノオトシゴのこと）」を安産の守りに持参する。弁慶入来の報に、腰元たちは女嫌いの弁慶をからかおうとするなど、和やかな端場。端場をカットして弁慶の出からいきなり始めることもある。

黒の烏帽子大紋で登場する弁慶は、「忠臣の鑑」として唐土の予譲に喩えられる（「忠臣蔵」九段目に全く同じ詞章）骨柄で、卿の君に「三忘」の物語の後、おわさに目を付け「わりや何者だ」と誰何。この件は原作にはなく、これに限らず「弁慶上使」は後補の文章が多く、先代野澤錦糸は「やる人によってこれほど違う浄瑠璃も珍しい」とのこと。侍従太郎夫婦の後から「鎌倉殿の難題をつひ打ち明けていへばえに」と弁慶が引っ込むところが、卿の君の首を打てという難題を抱え、信夫に目をつけて身替りを思いつく、肚を聞かせるところ。

おわさと信夫が久々の対面、その後、侍従太郎夫婦が沈痛な面持ちで再び登場。原作では、侍従太郎が信夫を妻に申し受けようとする件（その上で身替りにたてようというつもり）があるが、現在ではカットして単刀直入に身替りの相談。慌ておののく母娘ながら、信夫は「不束かな私でもお役にさへ立つなら」と言い出すので、おわさが遮って、父親と名乗り合うまではお役に立てぬと言い張る。十八年前の「二八あまりの稚児」との信夫を懐胎したいきさつでは、「すれつ纏れつ相生の」で寄り添う二人の想い、「つい暗がりの転び寝に」の後の合いの手は誰かが近寄る足音、「恋人も驚き、て」の産み字で暗闇の中の手探りの様子などを表現。娘の前を憚る話ながら、語り物の手法は時空を越えて、十八年前のその場のリアリティを追求する。原作では、「子を捨てて嫁入りせよ」という親の意見に背いた経緯も語られている。

「隔ての一重、始終立ち聞く武蔵坊」という弁慶の姿は障子の向こう側で、「障子越し『ぐつ』と刺いて」という、「ぐつ」の瞬間に逡巡と決意の表現。登場した弁慶が肌脱ぎになると、おわさと同じ伊達模様の大振袖。「そんならお前がその時の」で、おわさは一瞬にして昔の恋する娘に戻り、「スリヤこの娘は真実の、わが子ぢやないかいな」で再び現在に戻る。探し求めた父親がわかったにも関わらず、信夫はすでに耳が聞こえず、「必ず弁慶が傍へゐて、お前も殺されて下さんすなへ」と息絶えることに。死

骸を抱き締めてのおわさのクドキは、千変万化の足取りの聞かせどころ。

「弁慶涙押し隠し」から弁慶の物語。まずは娘への愛情、「たつた一度でござつた」という告白も切実ですが、「ほてゝんがうな事をして」という印象的な語彙は、悪いこと、いたずらに手を出すという意味。「鳴く蟬よりも」「鳴かぬ蜚の身を焦がす」は、諸国の歌謡を集めた『山家虫鳥歌』

（明和九年＝一七七二刊）にも収められて有名な唄。「これにつけても親の恩」からは、一転して親への恩愛を、「一谷へも押し寄せ／＼」「廣大無辺の親の慈悲」のような勇壮な語り口とともに表現しつつ、信夫の亡骸を抱き上げての嘆きとなる。雄大豪壮な語りは、「三十余年の、溜め涙」での大落としに極まり、時代物三段目のスケールを満喫させるところ。

侍従太郎の切腹からは早い足取りの段切れで、おわさと花の井の嘆きを、辛くも見捨てて首を持ち帰る。派手な聞かせところの多い曲で、かつては上演頻度が極めて高かったが、近年は必ずしもそうでもないところに、客席の興味の推移もうかがわれる。

（児玉竜一）